

境界域史の可能性

—長崎と朝鮮半島南部の地域史—

鈴木理恵

The possibility of history of frontier region

Rie SUZUKI

はじめに

長崎地域の歴史は、朝鮮半島や中国大陸と近いことに規定されてきた。古代において、対馬・壱岐は朝鮮半島からの先進文化をいち早く取り入れると同時に防衛の砦の役割を果たし、五島列島は遣唐使が中国へ渡る際の碇泊地を提供した。中世において五島列島は倭寇の拠点ともなった。元寇によって甚大な被害を受けたのは対馬や壱岐であった。近世の長崎出島は対外交渉の窓口と位置づけられ、対馬藩は朝鮮外交の任にあたった。

いっぽう、歴史教科書において長崎地域がまともに取り上げられるのは、島原の乱、鎖国体制下の出島や朝鮮通信使などに関わってであって、近世期に入ってからである。教科書に掲載された特徴ある扇形の出島図はインパクトを与える。それだけに長崎といえば、「海外への唯一の窓口」、「異国情緒」といったイメージが定着しているのではないだろうか。2005年秋に長崎市にオープンした長崎歴史文化博物館の常設展示内容も近世以降を対象としている。しかし、それまでの長崎に歴史がなかったわけではない。

歴史教科書の長崎関連記述は、中央政府との関連で果たした役割が取り上げられ、長崎地域に生まれ育った人びとを日本国家（都・中央）に一元的に同化させる役割を担っているように思われる。たとえば対馬の人びとは、対馬北端からおよそ50kmしか離れていない釜山の歴史を学ぶことは要求されないのに、600kmも離れた奈良や京都の歴史を学ばなければならない。長崎地域の人びとも近代以降の国民国家のなかで日本人として暮らすことを余儀なくされた以上、現日本国域の歴史を学ぶことが必要であることは言うまでもない。ただ、抽象的な「日本人」である以前に、長崎地域で生活する具体的な個人であることを忘れるべきではない。

長崎地域に暮らす人びとの生活が、同地域が朝鮮半島や中国に近いことに規定される現象は、今後大陸移動でもない限り変わらない。そうであるならば、そのシチュエーションのなかでどのように生きていくべきか模索していくほかないだろう。本稿の目的は、長崎地域に視点を置いたうえで北部九州と朝鮮半島南部地域をひとつの文化圏としてとらえ、そのなかで人びとがどのように生きてきたかを知ることを通して、今後朝鮮半島や中国の人びととどのような関係を結んでいくべきかを考えるための歴史教育のあり方を模索することにある。第1章で中学生を対象としたアンケート調査結果を分析して歴史教育の問題点を検討する。第2章では長崎地域の地理的特性がどのように歴史を規定してきたかを見

る。第3章で授業案を提示したい。

1. 中学生の歴史学習意識と古代「対外」関係史知識

(1) 歴史学習意識

長崎県下の中学生を対象にして2005年7・10・11月に「東アジア交流史に関するアンケート調査」を実施した。その目的は、学校における歴史教育のあり方が生徒の東アジアについての見方や考え方を形成するのにどのように関わっているのか明らかにすることにあった。長崎市内1中学校、壱岐市内3中学校、対馬市内4中学校に調査協力を依頼したところ、壱岐市内1校を除く7校の1425名から回答が寄せられた。地域と学年の分布は以下のとおり。長崎市595名(41.8%)、壱岐市322名(22.6%)、対馬市508名(35.6%)。1年生456名(32.0%)、2年生528名(37.1%)、3年生441名(30.9%)。

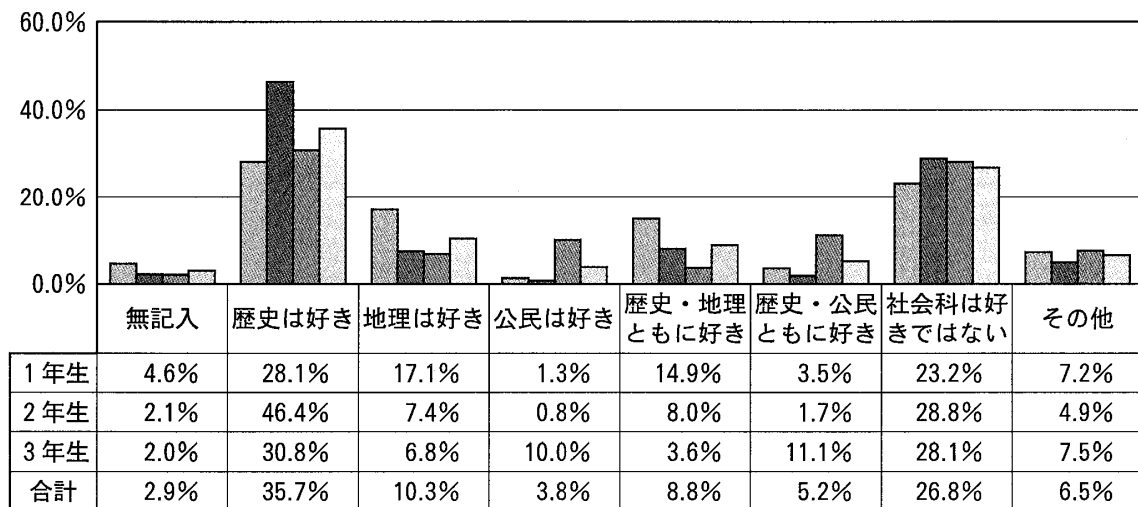


図1 社会科学習について

アンケートでは、まず学年を尋ねたあと、第2・3問で社会科学習、なかでも歴史学習に関して生徒がどのように感じているのか尋ねてみた。第2問で「社会科の授業や勉強は好きですか?」(複数回答可)と質問し、選択肢として①歴史の分野が好きだ、②地理の分野が好きだ、③公民の分野が好きだ、④社会科は好きではない、⑤その他、を設けたところ、図1のような結果となった。

好む分野としていずれか1分野のみを選んだ生徒は710名(49.8%)で、2分野を選んだのは221名(15.5%)、3分野ともに選んだのは20名(1.4%)である。学年別の内訳は図1のようになる。1年生で地理、2年生で歴史、3年生で公民を好む傾向がうかがえるが、特に公民は3年生で学習することになっているから、1・2年生で公民分野を好む割合が低いのは当然だろう。

歴史分野を選んだ生徒(歴史は好き+歴史・地理ともに好き+歴史・公民ともに好き+3分野ともに好きなど)は732名(51.4%)で、学年別にみると1年生が222名(48.7%)、2年生が297名(56.3%)、3年生が213名(48.3%)である。いずれの学年を通じても歴史分野を好きだと答えている割合が5割程度にのぼっていることは注目される。好む分野として地理を選んだ生徒は318名(22.3%)で、学年別内訳は1年生164名(36.0%)、2

年生85名（16.1%）、3年生69名（15.6%）である。公民分野を好きだと答えた生徒は172名（12.1%）で、1年生38名（8.3%）、2年生17名（3.2%）、3年生117名（26.5%）である。

いっぽうで社会科を好きではないと答えた生徒が26.8%、4人に1人以上の割合であることも確かである。歴史分野を好む生徒が多いだけに、歴史分野を苦手とすることが社会科全般を好まない主たる原因になっているのではないかと思わせる。

第3問では「歴史の授業や勉強についてどのように感じていますか？」（複数回答可）と尋ね、以下の①～⑪から選んでもらった。①～④は歴史学習についての肯定的な考え、⑤～⑦は否定的な考え、⑧～⑪は歴史学習意欲に関してみるための選択肢である。結果をあらわしたのが図2である。

- ①歴史を学ぶことは、これからの社会のあり方を考えるために大切だ。
- ②歴史上のできごとについて、どうしてだろう、なぜだろうと考えたり調べたりするのは楽しい。
- ③時代が新しくなるほど現代社会に関係が深いので、今に近い時代の歴史を学ぶのがおもしろい。
- ④時代が古くなるほど現代社会との違いが大きいのので、今と異なる時代の歴史を学ぶのがおもしろい。
- ⑤年代や人の名前など、覚えなければいけないことがたくさんあってたいへんだ。
- ⑥歴史を学んでも日常生活には役立たない。
- ⑦1000年も2000年もむかしのことを学んで何になるのだろうと疑問に思うことがある。
- ⑧源義経や織田信長などのような有名な人物についてくわしく学びたい。
- ⑨一部の支配者や有名な人物だけでなく、一般民衆の暮らしについてもくわしく学びたい。
- ⑩自分たちが暮らしている地域の歴史についてくわしく学びたい。
- ⑪外国や世界の歴史についてくわしく学びたい。
- ⑫その他

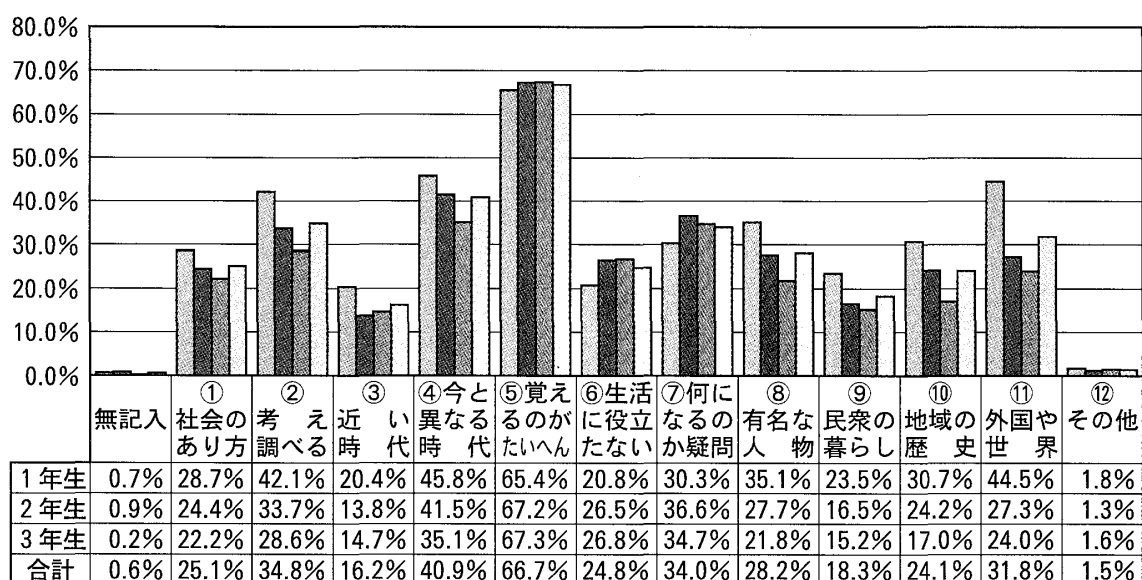


図2 歴史の授業や勉強について感じる事

いずれの学年でも⑤が最も高くなっており、ついで④を選択した生徒が40.9%、②が34.8%、⑦が34.0%と続く。学年があがるほどに、①～④の歴史学習への肯定観を示す選択肢を選ぶ割合が低く、⑤～⑦の歴史学習への否定観を示す選択肢を選ぶ割合が高く、⑧～⑪の歴史学習意欲を示す選択肢を選ぶ割合が低くなる傾向にある。中学3年生は学校の授業ではもっぱら公民分野を学ぶため、歴史学習から遠ざかることがこれらの一因かもしれないが、理由はそれだけではないだろう。

⑤が66.7%を占めていることから、「歴史は暗記科目」というイメージが定着していることがうかがえる。しかし、歴史分野を好きだと答えた732名のなかでも405名(55.3%)が⑤を選択している(405名は⑤を選んだ950名中の42.6%を占めており、決して低いとはいえない)ことから、「覚えるのがたいへん」と感じるものが、歴史嫌いには直結しないことを示しているといえるだろう。歴史を好きだと答えた生徒も年代や人名を覚えることをたいへんだと感じつつも、それ以上の魅力を歴史学習に感じていることをうかがわせる。その魅力とはなにかについて、図3をもとに考えてみたい。

図3は、生徒が好きだと答えた分野の組み合わせ別に、第3問の回答のあり方をまとめたものである。まず、「社会科は好きではない」と答えた生徒382名に注目したい。覚えるのがたいへんだと感じている生徒が83.5%にのぼり、そのことが歴史分野を嫌い、ひいて

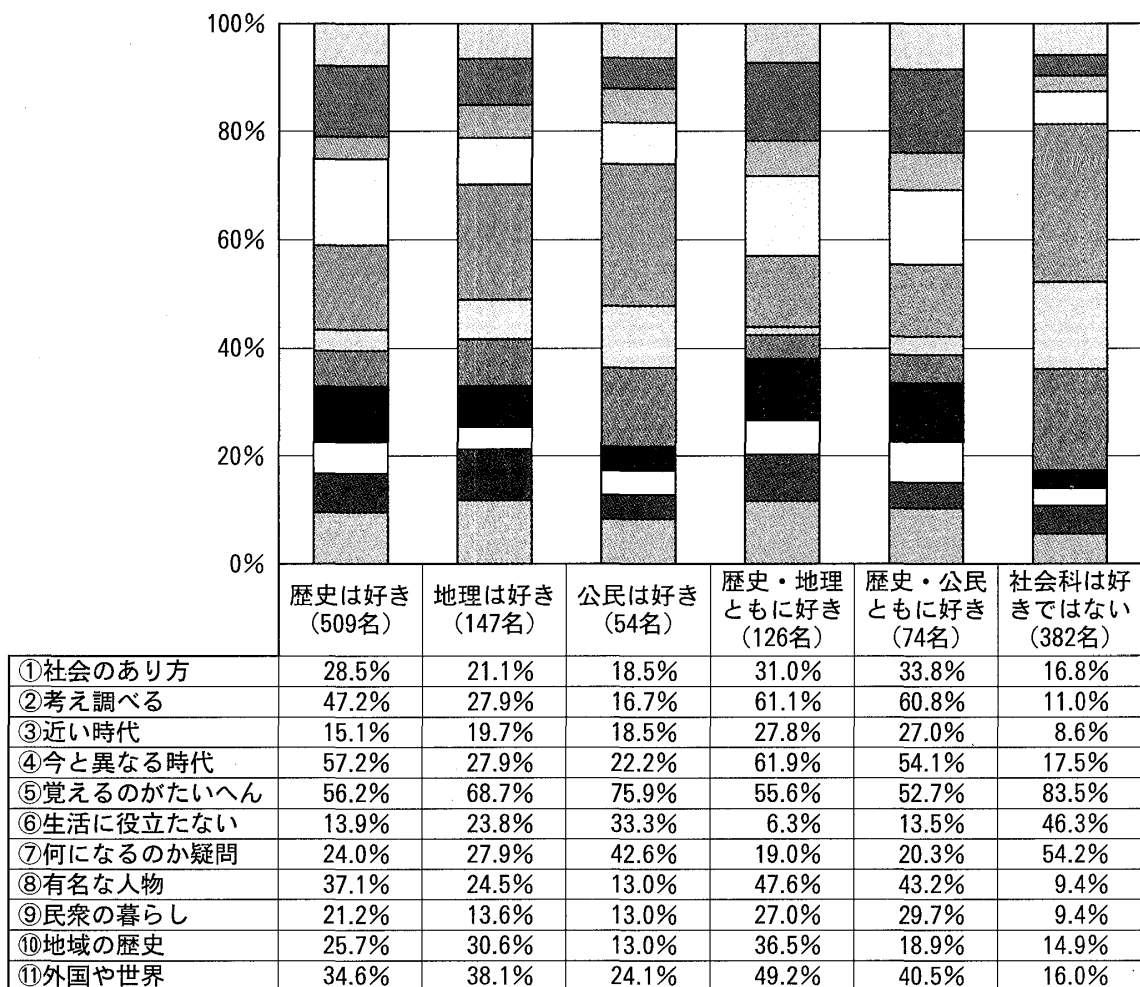


図3 好きな分野と歴史学習意識の関連

は社会科を嫌いにさせている主因となっていることをうかがわせる。また、⑥⑦の歴史学習に対する否定的考えの割合が比較的高く、逆に①～④の歴史学習に対する肯定観を示す割合が低く、⑧～⑪の歴史学習意欲も低い。

歴史を好きだと答えた生徒709名（歴史のみ＋歴史・地理＋歴史・公民）に共通するのは、②④の割合が高く、⑤⑥が比較的低く、⑧⑨が比較的高いことである。地理分野を好む生徒（地理のみ＋歴史・地理）は⑩の割合が比較的高く、地域の歴史に関心があることがうかがえる。公民分野のみを選択した生徒と、社会科を好きでないと答えた生徒は、①②および⑧～⑪の割合が低く、⑤～⑦の割合が高い点が共通している。歴史学習への意欲が低いといえる。

複数分野を好む生徒は、①～④の割合が高く歴史学習に肯定的で、⑤～⑦が低く、⑧～⑪の割合が高く意欲的であることがわかる。歴史と地理の両分野を好む生徒にその傾向が顕著である。また、歴史分野を好む生徒とそうでない生徒を比較すると②④⑥に大きな差が見られるが、特に歴史と地理が結びついたときに⑥が低くなっていることが目を引く。

歴史好きは④の割合が高く古い時代を好む傾向にあるが、それでも⑥「歴史を学んでも日常生活には役立たない」とか、⑦「1000年も2000年もむかしのことを学んで何になるのだろうと疑問に思うことがある」と考える割合は比較的低い。歴史を好む生徒は②の割合が高いことから、歴史上のことがらについて考えたり調べたりする楽しさを知っていることが、⑤～⑦の否定的な見方を低くしているものと考えられる。

しかし、全般的にみても歴史を好む生徒についてみても、④⑧⑪の割合が高く、③⑨⑩が低いことから、自分たちの身近な歴史には興味が向いていないことをうかがわせる。歴史教育の大きな課題であろう。

(2) 古代「対外」関係史知識

アンケート調査の後半では、古代の対中国・対朝鮮半島関係史に関する質問をした。第4問と第5問では、「縄文～平安時代の中国（大陸）（第5問では「朝鮮半島」）と日本列島との関わりについて、あなたが持っている知識はどのようなものですか？ 思いつくことばでもかまいませんからできるだけ具体的に簡潔に書いてください」として、縄文時代から平安時代にかけての中国（大陸）および朝鮮半島との関わりについての知識を書いてもらった。

中国大陸に関しては、961名（67.4%）の生徒がなんらかの単語を書き、その種類は185語彙、回答語数（延べ数）は2735語にのぼった。回答語数の分布を示したのが表1である。

表1 中国大陸および朝鮮半島との関係史に関する回答語数

回答語数	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11以上	回答語数合計(延べ)	回答者数合計	平均語数1	平均語数2
中国大陸	464	282	247	167	105	66	34	30	7	10	7	6	2735	961	1.92	2.85
朝鮮半島	825	334	155	62	18	14	12	4	1	0	0	0	1080	600	0.76	1.8

註) ①平均語数1 = 回答語数合計 / 全人数1425名

②平均語数2 = 回答語数合計 / 回答者数合計

表2 中国大陸および朝鮮半島との関係史にかかわる知識

順位	中国大陸 語彙数：185	朝鮮半島 語彙数：111
1	遣隋使 347 (24.4)	渡来人 229 (16.1)
2	遣唐使 333 (23.4)	百済 106 (7.4)
3	渡来人 251 (17.6)	白村江の戦い・新羅との戦い 91 (6.4)
4	金印・印・漢委奴国王・親魏倭王 161 (11.3)	仏教 84 (5.9)
5	稲作・米作り・米 139 (9.8)	稲作・米 79 (5.5)
6	文化 110 (7.7)	新羅 56 (3.9)
7	漢字・文字 92 (6.5)	文化 46 (3.2)
8	卑弥呼 91 (6.4)	技術 42 (2.9)
9	仏教 83 (5.8)	高句麗 36 (2.5)
10	小野妹子 68 (4.8)	戦争・争い 22 (1.5)

註) () 内は%。

最も多くの単語を書いた生徒の語数は17語であった。1425名ひとりあたりの回答語数は1.92語で、回答者961名ひとりあたりの回答語数は2.85語であった。これに対して朝鮮半島に関しては、600名(42.1%)が回答し、語彙数は111に、回答語数(延べ数)は1080となった。最も多くの単語を書いた生徒の語数は8語であった。半数以上が無記入であったために、全生徒ひとりあたりの回答語数は0.76語で1に満たないが、何らか書いた生徒の回答語数はひとりあたり1.8語となった。中国大陸に関する知識が朝鮮半島に関する知識を上回っていることが明らかとなった。

さらに回答が多かった単語を10位まで示したのが表2である。()内は全人数に占める割合を示す。表2から次の2点を指摘したい。第一に、中国関係史に比して朝鮮半島関係史に関する生徒の印象が薄いことである。中国大陸に関しては、4人に1人が「遣隋使」や「遣唐使」を書いており、生徒にとってこれらの印象が比較的強いことをうかがわせる。「遣唐使」や「遣隋使」は小学校から高校に至るまでの社会科あるいは日本史教科書には必ず登場し、しかも小学校の教科書には遣唐使遭難のエピソードや遣唐使船の絵などの視覚的情報が盛り込まれている^①ので、印象に残りやすいと考えられる。これに対して、朝鮮半島との関係史については最も回答が多かった「渡来人」ですら16%にとどまっている。また、稲作・漢字など朝鮮半島を介して入ってきたものが中国との関係でとらえられる傾向が強いのも特徴的である。

第二に、長崎地域、特に調査地である壱岐市や対馬市には、原の辻遺跡を代表として中国や朝鮮半島との関わりを示す遺跡・遺物が多いにもかかわらず、回答のなかに現われなかったことから、地域史への生徒の関心が薄いことをうかがわせる。

第6問では、古代における中国大陸・朝鮮半島との関わりについての知識欲を尋ねた(選択式)。「知りたいと思う」と答えた生徒(()内は1～3年生の内訳)は11.9%(15.1・11.6・8.8)、「知りたいと思わない」生徒は26.8%(20.6・26.7・33.3)、「どちらともいえない」生徒は51.6%(53.1・51.7・50.1)、「中国(大陸)・朝鮮半島との関係では近

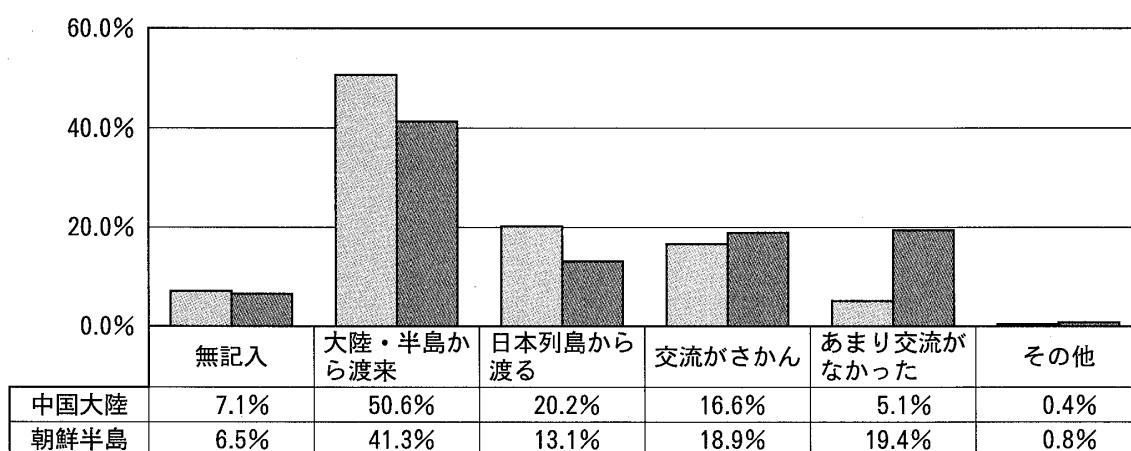


図4 中国大陸・朝鮮半島との関係イメージ

現代史のほうが重要だから、古代史にはあまり興味を持ってない」生徒は7.6% (8.8・7.6・6.6) で学年があがるほど意欲が低下する点は図2と共通している。

第7問および第8問では、縄文時代から平安時代にかけての中国大陸および朝鮮半島との関係についてのイメージ（選択式）を尋ねたところ、図4のようになった。

旧石器時代以来、古代においては、朝鮮半島から九州あるいは日本列島にやってくる人の数のほうが中国からやってくる人よりも圧倒的に多かった。一時的であろうと、永住であろうと、である。特に7世紀後半の朝鮮半島動乱期には、百濟人を初めとして、貴族階層から一般民まで少なくとも数千人に及ぶ広い階層の人びとが畿内や東国に移住した²⁾。図4から、事実と反して生徒が朝鮮半島との交流が活発でなかったというイメージを持っていることがわかる。

第9問では日本の古代国家についてのイメージ（選択式）を問うたところ、以下のような結果となった（（ ）内は1～3年生の内訳）。回答は分散しているものの①③④の割合が比較的高く、中国との関係の強さを認識している生徒が多いことがわかる。

- ①中国の制度をそっくりそのまま取り入れて、中国によく似た国家をつくった
……21.8% (23.7・23.9・17.2)
- ②朝鮮半島の国々を手本にして、朝鮮半島の国々によく似た国家をつくった
……5.8% (7.7・4.7・5.0)
- ③中国の制度を参考にしたが、中国とは異なる日本独自の国家をつくった
……31.2% (30.0・28.6・35.4)
- ④中国を手本にしたが、その際に中国の制度を日本の実態にあわせて変えた
……24.7% (21.5・23.3・29.7)
- ⑤中国の制度を取り入れたが、国家づくりは朝鮮半島から渡来した人びとの力を借りながら進められた……7.6% (6.1・9.7・6.8)
- ⑥その他……0.8% (1.8・0.4・0.5) 無記入……8.1% (9.2・9.5・5.4)

第10問および第11問では、現在の中国および韓国に関する情報源を尋ね、選択肢として、①テレビやラジオのニュース・ドキュメント・講座・特集など、②テレビドラマや映画、③インターネット、④新聞、⑤雑誌や書物、⑥旅行（中国あるいは韓国へ行った経験がある）、⑦留学生など中国から来た人から話を聞く、⑧学校の授業、⑨その他、を設けた。

中国情報に関しては、①79.2%、⑧50.3%、④36.9%、③30.0%、②22.9%、⑤17.5%、⑥⑦3.6%、の順であった。韓国情報に関しては、①79.9%、②40.6%、⑧39.5%、④36.9%、③29.9%、⑤20.1%、⑥10.3%、⑦4.5%、の順であった。①③④はほぼ同率だが、②⑥⑧で差が開いた。韓国情報を②で得ている生徒の割合が比較的高いことは、近年日本において韓国のテレビドラマや映画が流行したことを反映している。⑥韓国旅行を経験したことがある生徒が1割に及んでいるのは、韓国に近いという利便性ゆえだろう。⑧の差が約10%開いたのは、生徒が学校授業を通して韓国について学んでいるという意識が低いことを示す。

2. 長崎地域の地理的特性

現長崎地域の地理的特性として、日本の最西端に位置し、平坦地が少なく、海に囲まれ、海岸線が複雑で、島が多い、ということがあげられる。こうした特性はそこに暮らす人びとの生活に大きな影響を与え、歴史のあり方を規定してきた。

(1) 複雑な海岸線と多島性

日本の海岸線の長さは1,000km²あたり約88kmで世界的にみても長いほうだが、なかでも都道府県別にみたときに長崎県の1,000km²あたりの海岸線は約1,025kmで圧倒的に長い。総延長4,195kmの海岸線は、600近い島々と、複雑に入り組む入江・湾・半島・岬などによって、対馬・壱岐・五島列島・平戸諸島・西彼諸島を形成している。このような地形は、古くから海に親しみ海とともに生きる海の民を育ててきた。対馬佐賀貝塚からいたや貝や、ひおうぎ貝が出土しているがこれらは潜水によって捕獲されたのだろう。対馬・壱岐・五島には現代に至るまでアマ（海女・海士）が鮑やサザエ、ナマコなどを獲る習俗が存続してきた⁽³⁾。多島性ゆえ、魚介類を求めるためあるいは島間の移動のために、船に乗る必要にも迫られたはずである。地形もそれを促しただろう。島陰を利用すれば敵や強風などから守られるし、複雑な海岸線により形成された入江は港に適している。

また、平地が少ない、土地の生産性が低い、などといった条件が重なると、行動範囲の拡大につながる。世界的にみても同様の地形は海の民を育ててきた。デンマーク、フィンランド、スウェーデンなど北欧のいわゆる「ヴァイキング」と呼ばれる人びとは、優れた航海術と造船術を駆使して8世紀末から外洋に乗り出すことができた⁽⁴⁾。16世紀以降カリブ海に出没した海賊はイギリス人、フランス人、オランダ人を主体としたが、風向き、水の流れ、潮の満ち引き、時化などを知り尽くした巧みな船乗りでもあった⁽⁵⁾。現在も東南アジア海域やインドネシア周辺海域には海賊行為が発生し日本関係船舶も被害を受けている。日本列島内においても、瀬戸内海（特に海岸線が長く島が多い現愛媛県域）ではかつて村上水軍が勢力をほこった。長崎県域も倭寇や松浦党の根拠地であった。

対馬は『魏志』東夷伝倭人条に「土地山陰，多深林，道路如禽鹿径，有千余戸，無良田，食海物自活，乗船南北市糴」と書かれ、『対馬国貢銀記』（11世紀）や『海東諸国記』（15世紀）にも耕地に乏しく食糧確保を他地域との交易に求めなければならなかったようすが記されている⁽⁶⁾。近世期の対馬藩宗氏は朝鮮との貿易を独占し、その利潤を家臣に分与することで知行に替えた。現在もその89%が山地で農業に適していないことに変わりはない。

遣唐使船は8世紀に入ると、従来の北路（朝鮮半島沿いに北上するルート）を捨て、東シナ海を突っ切って中国沿岸にたどりつく南路をとるようになったといわれている。南路

の場合に五島列島が最後の寄港地となった。『肥前国風土記』には値嘉嶋（五島列島）に遣唐使船の碇泊する港として相子田と川原の二つがあったと記されている⁽⁷⁾。古代においてもすでに五島列島は日本の最西端と認識されていた⁽⁸⁾から、中国に最も近いことは知られていたはずである。そのうえに、五島列島が要害や風待ちに適した地形を備えている⁽⁹⁾ことや、海を熟知した民の存在も魅力だったのではないだろうか。

(2) 海流・季節風

長崎地域を囲む東シナ海を北上する対馬暖流や、季節によって吹く風は、はるかかなたの情報をもたらしてくれる。複雑な海岸線も影響して長崎には漂着物が多い。熱帯地域からさまざまな植物の果実や種子が海流に乗って漂着している⁽¹⁰⁾。代表的な漂着果実ココヤシはもちろんのこと、イルカンダ（アジアや南太平洋の熱帯から亜熱帯に分布）、ゴバンノアシ（東南アジアから南太平洋の島々の海岸に分布）、オオミナンキンハゼ（インド・マレー半島などの河口付近に生息）、サキシマスオウノキ（東南アジア・ポリネシア・アフリカ・奄美大島以南の南西諸島に分布）、シロップ（熱帯に広く分布）、ハウガンヒルギ（インド・東南アジア・南太平洋に分布）、モダマ（東南アジアから南太平洋に分布）、モモタマナ（東南アジアや南太平洋諸島の海岸に生息）などの果実や種子の漂着が記録されているという。壱岐原の辻遺跡からはココヤシの果殻でつくられた笛が出土した。古代人も浜辺に打ち寄せられたココヤシを拾い、自分たちの暮らす土地とは植生の違う土地があることを認識しただろう。現在の長崎にも、日本国内からはもちろん韓国・中国からの漂着ゴミが流れ着いていることは周知の通りである⁽¹¹⁾。

対馬から朝鮮半島へ渡るには海流を利用し、遣唐使や中国貿易船などが東シナ海を横断する際にも季節風を利用した。現在の海上輸送に使われる船や漁船の多くは動力船だから航海が海流や季節風に左右されることもないだろうが、海に漂うばかりの物体は水流と風任せであってかつての帆船や人力に頼っていた頃の航海への想像力を掻き立てる。

(3) 好漁場

長崎県には有人島が55島存在し、都道府県別にみると沖縄県（40島）、愛媛県（32島）などを抜いて圧倒的に多い⁽¹²⁾。「離島」では漁業に従事する人が多いのが特徴である。『国勢調査報告』によれば平成12年の長崎県労働人口のうち漁業従事者が占める割合は2.8%であるが、「離島」（平成12年国勢調査当時の離島）の漁業従事者は13.8%を占めている。平地が少なく農業に適さない島が多いためであるが、好漁場に恵まれていることも漁業がさかんな理由である。

平成15年の長崎県の漁業生産量はおよそ31万3千トンにのぼり、全国比5.2%で北海道（約28%）、宮城県（約7%）について3位となった。漁業生産額は1,086億円で、同7.3%で北海道（約17%）について2位となった。漁業経営体数の全国比は8.1%、漁業就業者数のそれは8.4%、漁船隻数のそれは7.8%を占めた⁽¹³⁾。これらの数字は、水産業が長崎県の基幹産業であることを示している。漁業部門別にみると、平成15年の総生産量のうち沖合漁業が約67%を占めているのが特徴的である。魚種別にみると、あじ類・さば類・いわし類・いか類などの漁獲量が目立って多いが、そのほか、マグロ・ブリ類・タイ類も少なくない。

ところで、長崎県域に残る縄文時代の遺跡から西北九州型結合釣針や石鋸装着銛の歯が出土している⁽¹⁴⁾。西北九州型結合釣針は、鹿骨製の軸部と猪牙製の針を紐で結ぶと7cm

にもなる大型の針で、マグロ・サワラ・アラ・シイラ・サメなどを捕獲するために使用されたと考えられている。石鋸装着銛は、木製の柄の先端両側面に溝を掘り、鋸歯状に加工した黒曜石をはめ込んだもので、イルカなどを突き刺すのに適している。これらの遺物とともに諸遺跡から大型魚や海獣の骨が出土している。長崎地域に暮らしてきた人びとが縄文時代から沖合に船で乗り出していたことが明らかである。

以上のような地形的特徴は、佐賀・福岡地域や朝鮮半島南部にも該当する。海に慣れた人びとが北部九州と朝鮮半島を往復していたことは、結合釣針⁽¹⁵⁾や石鋸装着銛などが朝鮮半島南部や北部九州に分布して出土することから裏付けられる。このような漁具の共通性は、獲物の共通性から来ている。朝鮮半島南部新石器時代の遺跡や北部九州縄文時代の遺跡ではマグロ・ブリ・マダイ・エイ・サメ・クジラ・イルカ・アシカなどの共通した魚や海獣類の骨が出土している。好漁場を挟んで両地域の人びとが海に乗り出し、互いの土地を行き来していたことをうかがわせる。

以上、述べてきたような地形的特性は、朝鮮半島南部にも該当する。済州島に海女が多いのも、火山島のために岩石が多く、年間を通し風が強いために農業には適さず、魚介類の豊富な海に職を求めた結果とされている⁽¹⁶⁾。地理的特性の共通性が、長崎地域と朝鮮半島南部の人びとの生業や生活、習俗に共通性をもたらしたといえる。

3. 授業案

以上から、長崎地域がその地理的的特性に規定された歴史を積み重ねてきたにもかかわらず、現在そこに暮らす中学生は身近な地域史を認識していないことが明らかとなった。そこで、長崎県の産業や地理に関する知識を生かして長崎地域史を学ぶことのできる授業を構想した。この授業では長崎地域が朝鮮半島と密接な関係を有していたことを扱うので、朝鮮半島を通じて大陸文化を受容したとされる「日本歴史」を学ぶ導入としても有効である。以下の授業案は、2006年4月に大学生15名・短大生13名の2クラスを対象に実践した事例をもとに作成したものである。

授業方法としては、教員が資料を提示して課題を学習者に投げかけ、学習者がシートに記入する方式をとる。学習者ひとりひとりが考え、書き、まとめ、報告するという具体的な作業を保障するためである。教員は、学習者と学習者、学習者と資料の媒介者の役割を果たす。授業で大切なのは教員がどれだけ教えたかではなく、ひとりひとりがどれだけ学んだかということであるからだ。基本的知識を習得することに加え、その事項が互いにどのように関連しているのかを理解することが重要である。

このような方法を採用するのは、歴史、学問、学校（学習）という3つの観点で学習者を主体とするためである。まず、歴史的主体とは、学習者ひとりひとりが社会の構成員であり、日々の生活を営むことによって現在進行形で歴史をつくっている主体であると自覚することを意味する。一部の支配者や文化人などのいわゆる「偉人伝」としての歴史を学んでいる限り、歴史学習は絵空事でしかない。他人事としてではなく、自分の生き方に関わる歴史学習であるべきだ。

学問の主体とは、学問とは創造的なものだと学習者自身が感じるようになることを意味する。教科書に書かれたことがらが動かし難い固定的な知識として与えられれば、学習者はひたすらそれを覚えるしかないだろう。ことばを覚えなければそれを操作して思考する

ことができないから、人物・年代・事件などを覚えることが必要なのは言うまでもない。しかし、時代が古くなればなるほど、もともと答えの出ない、あるいは考古学的な発見によって覆される運命にあることがらが少なくない。比較的新しい時代についても、「事実」の評価が社会の変化によって変わることはしばしば経験することであるし、歴史教科書問題に象徴されるように国によって歴史認識が異なることもある。大切なのは「正しい答え」を覚えさせることではなく、学習者ひとりひとりに考える自由を保障することだ。自分の出した答えがまんざら間違っていないかも知れないという自信、自分たちも学問に参加しているという感覚を学習者が持つことができれば、歴史学習のイメージは全く違ってくるはずである。

学校（学習）の主体とは、学校や教師との関係性のなかで学習者が抑圧された客体におしとどめられることなく、主体的に活動できることを意味する。パウロ・フレイレは教師（預金者）による一方的語りかけが生徒（空の金庫）を機械的な暗記者にするとして、銀行型教育を批判した⁽¹⁷⁾。そこでは、すべてを知っているとされる教師が考え、語り、しつけ、選択し、行動する主体であり、何も知らないとされる生徒は、教えられ、しつけられ、教師の選択を押しつけられ、教師の行動を通して行動したと幻想する客体におしとどめられているという。フレイレは、教師と学習者の教える－教えられるという関係性を固定化せずに、課題（教師と学習者の両方に批判的省察をうながす媒体）を媒介としながら対話を通して互いに教え合う課題提起型教育を提唱している。課題提起型教育は学習者を批判的思考者にすることが可能である。そのためには、資料に基づき、手順を踏んで論理的な思考を積み重ねていく必要がある。そうしたことの積み重ねによって学習者は創造的な主体となりうるだろう。

ねらい：縄文時代の長崎地域の海民と、新石器時代の朝鮮半島南部の海民とは、同じ魚を求めて海に乗り出し、あるいは交易のために互いの土地を往来していた。そうした往来の延長線上に稲作の伝来が位置づけられることを理解する。前近代は、舟による交通がさかんであったこと、現長崎地域の造船業や水産業がさかんという産業構造の特徴が、同地域の地理的特性やそれに規定された歴史によって形成されたものであることを理解する。

形態：4～5人程度のグループをくむ。考える、書く、まとめる、発表する、といった個人的作業を全員に保障すると同時に、グループ内で多様な考えに触れ、互いの意見に触発されて個人の考えをみつめなおし、意見を修正する機会を提供するためである。

教員側の用意：朝鮮半島南部から西北九州にかけての地図（あるいは板書）、韓国東三洞貝塚出土の縄文土器片・結合釣針の写真、長崎壱岐松崎出土の櫛目文土器片の写真（あるいは絵）、西北九州型結合釣針の写真（あるいは絵）、発掘された丸木舟の写真⁽¹⁸⁾。

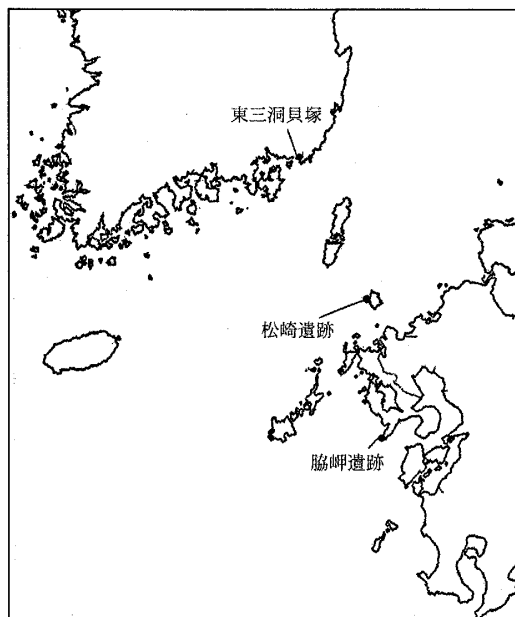


図5 朝鮮半島南部から西北九州にかけての地図

第1段階：朝鮮半島南部から九州で作られた土器が、西北九州から朝鮮半島で作られた土器が出土した理由を考える。地図上の朝鮮半島東三洞に縄文土器の写真，壱岐松崎に櫛目文土器の写真を貼る。東三洞貝塚，松崎遺跡，櫛目文土器などの説明を簡単におこなう。東三洞貝塚は，現在の韓国釜山広域市の南，影島区にある。7500年前から3500年前までの4000年間をかけて形成された5文化層から，櫛目文土器や石器，漁具，装身具，動物の骨などとともに縄文土器や腰岳産の黒曜石が出土した⁽¹⁹⁾。櫛目文土器は朝鮮半島新石器時代の土器で櫛目の沈線文が施されているのが特徴である。その器形・胎土・施文の特徴が九州の曾畑式土器に影響を及ぼしたといわれている⁽²⁰⁾。松崎遺跡は壱岐市勝本町の湯ノ本湾内にあり，縄文時代後期を中心とする遺跡である⁽²¹⁾。

疑問の提示：「なぜ九州で作られた縄文土器が東三洞から見つかったのか。逆になぜ朝鮮半島で作られた土器が壱岐松崎で見つかったのか」という疑問を学習者に提示する。

学習者の作業：まず考えられる可能性を個人でシートに記入し，グループ内で各自の意見をひとつおとり述べたあとにグループで意見をまとめて報告する。

シート：東三洞から見つかった縄文土器と壱岐松崎から見つかった櫛目文土器のそれぞれに関して，a どの人が運んだのか（運搬主体），b なんのために運んだのか（運搬理由），c どのように運んだのか（運搬手段）の3点について考えられる可能性を書く。次に，a～c で出した答えを組み合わせ，最も確かだと考えられる可能性を文章にまとめる。

教員の作業：グループから出された意見のa～cについて黒板にまとめる。出された可能性に関して吟味していく。a に関しては，交易（物々交換）という答えがあがると予想されるが，これについては土器がなんのために作られ使われたものであるかを確認させる。土器は食糧の貯蔵や煮炊きに利用するものであり，日常的でどの地域にも存在するものである。しかも壊れやすい。したがって，土器自体が交易の対象となることは考えにくい。何らかの活動，交易の結果として土器が他地域に運ばれ，その地に残されたと考えられることを説明する。すなわち，縄文土器は九州に住んでいた人が，櫛目文土器は朝鮮半島に住んでいた人が，他地域に持ち込んだことになる。

第2段階：地図に人の動き（朝鮮半島から壱岐へ，壱岐から朝鮮半島へ）を矢印で書き入れ，「なぜ両地域の人たちは互いの地域を行き来していたのか，交易がなされていたとするならば何がその対象となったのか」という疑問を提示する。地図上の朝鮮半島東三洞と長崎協岬に結合釣針の写真を貼り，結合釣針の説明をする。結合釣針は，軸の部分と針の部分を別の素材でつくって結合させ使用した大型（7 cm以上）の釣針である。「なぜ同じ形をした漁具が朝鮮半島南部と長崎で見つかるのか」「結合釣針でなにを獲るのか」と問うてみる。朝鮮半島南部と北部九州の諸遺跡からは共通する大型魚の骨が出土していることから，両地域で同じような漁具を使って同じ獲物を求めていたということがわかる。そしてこれらの大型魚は沖合に出なければ獲れないことから，両地域の人びとが外洋に出ていたことがわかる。以上のことをもとにして，「なぜ両地域で，他地域製作の土器が出土するのか」という質問にもどり，グループ内で意見交換させ，発表させる。大型魚を求めて丸木舟で沖合に出た人びとが持ち込んだ土器が互いの土地に残ったと考えられること，朝鮮半島から出た舟は壱岐や対馬を中継地としたであろうことを確認する。

第3段階：「なぜ長崎地域に暮らす縄文人は沖合まで魚をとりに行ったのだろうか、なぜ朝鮮半島までいったのだろうか」という疑問を提示する。長崎地域の現在の産業構造や漁業生産高などについて説明し、漁業がさかんであることを確認する。縄文時代から現代まで漁業がさかんなのは、長崎地域が海に近く、豊かな漁場が近くにあるという環境にあることはもちろんだが、それだけではない。そこに暮らす人びとが海に慣れ親しむ条件、あるいは海に乗り出さざるを得ない理由があった。その理由を、平坦地が少なく、島が多く、海岸線が複雑であるという長崎地域の地形的特性から考える。世界的に漁業がさかんな国々や、ヴァイキングが出た北欧や海賊が活動したカリブ海などを地図帳で確認して、その地形の共通性を理解させる。朝鮮半島へ渡った理由については、東三洞から腰岳（現佐賀県伊万里市）産の黒曜石が出土していることから黒曜石の交易がおこなわれていたことが考えられる。

まとめ：以上のような朝鮮半島南部と北部九州の海の民の往来が、縄文時代の終りに北部九州に稲作をもたらした。高度経済成長以降現代人の主たる交通手段は自動車や鉄道に移ってしまったが、それ以前、特に前近代は陸上の徒歩か船による海や河川の交通が主であった。そのため、継続的に活発ではなかったにせよ長崎地域と朝鮮半島との行き来が連綿と続いてきた。

大学生の意見：東三洞から見つかった縄文土器に関しては、a①北部九州の人、②壱岐の人、③朝鮮半島の人、b①交易、②文化伝承・技術移入、③贈り物、④漁の途中で偶然発見した陸地に上陸、⑤移民（新天地を求めて・生活地をもとめて）が生活道具として持ち込んだ、⑥漁の途中で船から落とした、c①船、②漂着、といった可能性が示された。壱岐松崎から見つかった櫛目文土器に関しては、a①北部九州の人、②朝鮮半島の人、b①交易、②文化伝承・技術移入、③捨てられたものが漂着、④移民が持ち込んだ、⑤中国に行こうとして漂着、c①船、②いかだ、③漂着、という可能性が示された。受講生からは「中学校では大まかな事だけしか学ばなかったことが、長崎周辺をピックアップして、自分で考えたり、皆の意見を聞いたりして答えを探していくというのはとても楽しかった」「歴史は史料（文書はじめ遺物・図像・音声・伝承などがある）でつくられるという言葉が理解できた授業だったと思う。今回はある事実をもとに私たち自身が考察し、歴史をひもとく作業をしたが、これまで歴史の伝承を担ってきた人々の考え方や苦労がわかったような気がした。また、あるひとつの史料だけをもとにして考えるのではなく、確証のある既成事実や他のさまざまな史料・証拠などと照らし合わせて考察することが大切だということも学べた」「東三洞や壱岐からの出土品について、交易・漂着などさまざまな想像ができてたいへん楽しかった。自分たちの生きていない時代の歴史がどうであったのか考えるというのは実に興味深かった」といったような感想が寄せられた。しかし、「縄文時代から韓国と交流があったということに驚き、お互いに深い歴史があるのだということに気付いた」とか、「縄文時代から日本は他国との交流があったことがわかります。国と国との公な交流だったとはいえませんが、海を渡ることによって他の国の良い文化や技術を取り入れ、日本文化の発展に貢献したと思います」といったように、国という固定観念をはずすことはできず、課題が残った。

本授業は大学生や短大生に対して実施したものであるが、説明を具体的にすることで中学生や高校生を対象にすることも可能である。長崎県下の中学生には『ふるさと長崎県』⁽²²⁾

という、地理・歴史・公民の各分野から長崎県について詳細に書かれた冊子が配付されているから、これを活用すれば長崎地域から日本歴史をみなおすことができるだろう。

おわりに

朝鮮半島の新石器時代や西北九州の縄文時代には国や国境は存在しないから、人びとは生業のために、パスポート無しに互いの土地を行き来することができた。何千年も経った現在でも長崎地域の地理的特性は基本的には変わらず、そこに暮らす人びとは当時と同じように漁業をなりわいとして生きているものの、かつてのように朝鮮半島との間を自由に行き来することはできなくなってしまった。かつて海の民を主体とする共通文化圏に属していた両地域を、ふたつの国に隔てたのは海だけではない。

自然環境が生活様式を規定するという普遍性にもかかわらず、人は民族や国家というものに縛られてきた。その歴史に気づくことができれば、近代が作り出した国民国家を相対化することが可能になるだろう。グローバル化が進み人や情報が国を越えて動いている。国民国家が自明のものではなくなったいま、人と人の関係というミクロな視点に立ち戻り、人の移動や社会的結合がどのように、そしてどのような地域を生成してきたのかについて歴史的に明らかにしていくことが重要である。その際に境界域史の視点は歴史研究と歴史教育の可能性を広げてくれる⁽²³⁾。

註

- (1) 鈴木理恵「歴史教育における遣唐使の発見—メディアとしての教科書分析—」、『教育史フォーラム』2, 2007年。
- (2) 古代の「渡来人」に関しては、関晃『古代の帰化人』（関晃著作集第三巻、吉川弘文館、1996年）、権又根『古代日本文化と朝鮮渡来人』（雄山閣出版、1988年）、井上満郎『古代の日本と渡来人』（明石書店、1999年）、田中史生『倭国と渡来人』（吉川弘文館、2005年）など多くの研究がある。
- (3) 「長崎県の海女（海士）」（海女（海士）民俗文化財特定調査、1979年）、大島暁雄監修・都道府県教育委員会他編『日本の漁村・漁撈習俗 調査報告書集成11 九州地方の漁村・漁撈習俗』、東洋書林、2004年。
- (4) B・アルムグレン編（蔵村不三也訳）『図説ヴァイキングの歴史』、原書房、1990年。
- (5) フィリップ・ジャカン（増田義郎監修、後藤淳一・及川美枝訳）『海賊の歴史』、創元社、2003年。
- (6) 対馬に関しては、永留久恵『対馬古代史論集』（名著出版、1991年）、永留久恵『古代史の鍵・対馬』（大和書房、1994年（1975年初版））、正林護『ながさき古代紀行 Vol. 1 対馬』（タウンニュース社、1995年）などの文献がある。また、坂田邦洋『対馬ヌカシにおける縄文時代中期文化』（別府大学文学部考古学研究室、1978年）、坂田邦洋『対馬越高尾崎における縄文前期文化の研究』（別府大学文学部考古学研究室、1978年）など遺跡に関する個別研究もある。
- (7) 『肥前国風土記』松浦の郡、植垣節也校注・訳『風土記』（新編日本古典文学全集5）、小学館、1998年、P337。
- (8) 『延喜式』巻十六に載せられた追儺祭文では、疫鬼を、東方陸奥・西方遠値嘉（五島

- 列島)・南方土佐・北方佐渡という四至より遠いところに追放するように規定している。
- (9) 東野治之『遣唐使船 東アジアのなかで』, 朝日新聞社, 1999年。
 - (10) 中西弘樹『漂着物学入門』, 平凡社, 1999年。
 - (11) たとえばいわゆる使い捨てライターの漂着について藤枝繁氏が調査している。「ディスプレイブルライターを指標とした海洋漂着散乱ゴミの流出地推定」『漂着物学会誌』1, 2003年。
 - (12) 日本離島センター『2002離島統計年報』。
 - (13) 九州農政局統計情報部編『東シナ海地域及び九州における漁業動向』, 九州農林統計協会協議会, 2005年。
 - (14) 木村幾多郎「縄文時代の日韓交流」, 後藤直・茂木雅博編『東アジアと日本の考古学』Ⅲ, 同成社, 2003年。渡辺誠「朝鮮海峡における漁民の交流」, 『日韓交流の民族考古学』, 名古屋大学出版会, 1995年。西谷正「古代朝鮮と日本との交流」, 李成市・早乙女雅博編『古代朝鮮の考古と歴史』, 雄山閣, 2002年。
 - (15) 西北九州型結合釣針は朝鮮半島のオサンリ型結合釣針(江原道オサンリ遺跡(韓国新石器時代早期の代表的遺跡)から多量に出土。軸は頁岩製, 針は骨製)に起源をもつ。
 - (16) 飯島秀郎・矢野博・角田泰造「韓国済州島海女の潜水作業実態について」, 『民族衛生』58-2, 1992年。
 - (17) パウロ・フレイレ(小沢有作・楠原彰・柿沼秀雄・伊藤周訳)『被抑圧者の教育学』, 亜紀書房, 1988年(1979年第一刷)。
 - (18) 東三洞貝塚から出土した遺物の写真は, 동삼동패총전시관 전시도록(東三洞貝塚展示館図録, 釜山博物館, 2002年)に掲載されている。西北九州型結合釣針については, 木村幾多郎前掲註(14)論文や渡辺誠前掲註(14)論文に図が掲載されている。丸木舟に関しては次のような文献がある。茂在寅男『船と古代日本』(PHP 研究所, 1987年), 松枝正根『日本古代の軍事航海史』上巻(かや書房, 1993年), 石井謙治監修『日本の船を復元する』(学習研究社, 2002年), 千田稔編『海の古代史』(角川書店, 2002年)。
 - (19) 東三洞貝塚については, 동삼동패총전시관 전시도록(東三洞貝塚展示館図録), 森浩一監修『韓国の古代遺跡』2 百濟・伽耶篇(中央公論社, 1989年)などを参照。
 - (20) 櫛目文土器については, 崔鐘赫「櫛目文土器時代 韓半島新石器文化の動態」, 西谷正ほか編『韓半島考古学論叢』, すずさわ書店, 2002年, 参照。『国立中央博物館』(韓国ソウル, 中央博物館展示図録, 2000年)に岩寺洞から出土した櫛目文土器の完形写真が掲載されている。
 - (21) 中上史行『壱岐の風土と歴史』, 中上史行, 2002年(1995年初版)。『勝本町文化財調査報告書 第11集 松崎遺跡』, 長崎県勝本町教育委員会, 2003年。
 - (22) 長崎県教育庁学校教育課編, 長崎県教育委員会。
 - (23) 日本史を越える歴史教育に関しては, 加藤章編『越境する歴史教育』(教育史料出版会, 2004年), 西川正雄編『自国史を越えた歴史教育』(三省堂, 1992年)などの研究があるが, 二国にまたがる地域(境界域)をひとつの文化圏としてとらえる視点からの研究は管見の限りではない。

付記

本稿作成にあたり、長崎県下7中学校の生徒1425名のみなさんにアンケート調査にご協力いただきました。ここに記して感謝申し上げます。なお、本稿は、平成17年度長崎大学高度化推進経費による成果です。